

## 新しい時代の医学教育に感じた希望

17S2033

月崎時央

### ■交通事故の5倍も医療事故が起きている？！

医療事故は年間2万件以上、交通事故は年間4000件を切っている！  
このデータは、それぞれの事故の規模にもより単純に対比できるかどうかはよく分からないがとにかくこの数字です。一応、医療ジャーナリストと名乗りお仕事をしている私、医療のリスクについて少しは知っているつもりですが、今日の講義は目からウロコ！ 恥ずかしながらこの比較にまず驚きました。

例えば「交通安全」という言葉は58歳の私が小学校に入る頃から言われていたこと。ランドセルには交通安全の黄色いカバーをつけ、交通安全のお守りをぶら下げ、学校の図工でも「交通安全」のポスターを毎年描いていたように思います。「自動車は人間にとって危険なものだから気をつけて歩け」というのは子ども頃から刷り込まれていますが考えてみるとなぜこの安全だけが強調されたのか不思議でもあります。一方の医療安全というのは、今もってほとんど耳慣れない言葉です。

でも例えば「体の中に入れる薬は、あなたの体にとって良いものかどうかはわからないから飲んだ時は慎重に自分の体調を観察しなさい」とか、「医師も間違っ  
て診断を下すかもしれないから、自分でもいろいろ調べて主体的に医療に関わりなさい」と言われたことはないのです。

交通も医療も人間のすることなのでエラーの可能性は同じなのに。なぜか私たちは「医師」や「教師」、「先生」と呼ばれる人をととても尊敬し信頼し、すべてを委ねてきたのです。つまり、ながらく「先生」への依存を続けてきたということなのでしょう。

さて本日の乃木坂スクールは「新規代の医学教育を目指す国際視野と医療安全」というテーマで国際医療福祉大学の医学部医学教育統括センターの教授宮田哲郎さんと赤津晴子さんの講演でした。さらにここに患者・家族と医療をつなぐNPO法人架け橋の理事長の豊田郁子さん（当事者家族）、同じく医療被害者の家族である永井裕之さん（「医療の良心を守る市民の会」代表／患者の視点で医療安全を考える連絡協議会 代表）のリアルな体験や医療事故のエピソードも交えたとても立体的な講義となりました。

## ■医療の教育に対話型コミュニケーションを

医療プロフェッショナリズムを医学生さんに教える宮田さん、学生のカリキュラム作りに関わる赤津さんのお話をお聞きし、これからの医学生の教育に新しい可能性を感じる事ができた幸福な時間でした。

座学での一方的な講義は効果が薄いであろうことは、すでに学校教育の世界でも言われていることですが、すでに世界標準の医学教育で単純な講義形式を廃止する方向であることを赤津さんからお聞きしたことは衝撃的でした。医師になる若い方々にとにかく患者の声をたくさん届ける機会を増やして欲しいと思います。

## ■1周遅れの精神科が持つ可能性

特に医療の中では遅れていると思われるのが、私に関わる精神科です。この新しい教育は特に精神科に必要だと感じます。取材すればするほど精神科医の皆さんは恐ろしいほど患者さんの実態を知らないです。現行の教育のままであれば「患者はどうせ頭のおかしい人だから、聞くふりだけして対話は成立しない」という「偏見」を教育されそうです。理解する「ふり」をしたり「患者さま」という表面的な表現を使っても、心の底から対等な人間であることを認めあわない限り関係性は歪んだまま、対話は成立しません

これからの医療は本当に対話とコミュニケーションが求められる時代です。精神科で改革を目指す人々は今、オープンダイアログ、SST、当事者研究、WRAPなど精神科から新しい様々な対話の方法を生み出そうともがいています。それはノウハウであると同時に「対話のための哲学」だと思います。精神科から始まろうとしている医療者と患者の対話には、医療だけでなく、人々の関係性を変える可能性が内包されていると私は感じています。

患者と医師の知識量は圧倒的に違い、対等になることは容易ではないかもしれません。

でも体験や感覚は患者さんだけが持つ貴重なものです。

そして医師は宮田さんのおっしゃるように「もし目の前の患者が私の家族なら、もし目の前の患者が私なら、その治療法を本当に選択するか？」と医師が患者のことを常に我がこととして自問自答する機会が必要です。もっともっと医療者と患者が語り合う機会が増えることを切に望みます。

9月17日の世界患者安全デーに、私も何かできたらと考えています。